

合併号！

8

2021

9

2021

# ニジェール支所便り

## 支所長よりひとこと

8月には朝から曇りの日も多く日中にもたびたび強い雨が降り、夜中、屋根のトタンに当たる突然の激しい雨音で飛び起きることもあった雨季ですが、9月下旬になりそろそろ峠を越えてきたかなというこの頃。

例年のように各地で被害をもたらす洪水は、人道活動・災害管理省によれば、マラディ、タウア、ザンデル州での被害が大きく、9月上旬で被災世帯2万5千超、被災者数19万5千人超となっています。昨年と比べれば、被災世帯・被災者数とも約半分規模ですが死者数は66人と同規模に上っており、今後の降雨の状況が気になるところです。

私の自宅の周りは幸いなことに沢山の大きな水たまりに包囲された程度ですが、そんなに深くないことはわかっているものの20年落ちの愛車RAV4で通過せざるを得ないときには床上浸水や立ち往生しないかスリリングな体験をしています。



それにしても、NHK WORLD JAPANのニュースで見る日本の豪雨災害の大きさ、新型コロナ感染者数には驚くばかり。ニジェールの新型コロナ感染者の累計(9/19付)は5962人、うち回復5700人、これまでの死者数累計は201人、入院者0と発表されています。昨年11月の第2波以降は新規感染者

はほぼ毎日1桁台の増加にとどまっております、中国やCOVAX枠組み、米国などから提供されたワクチンで接種キャンペーンが行われていますが、変異種の流行も少なく国民の切迫感は薄く接種率は4%程度に留まっています(政府は年末までに30%を目標)。現在むしろ深刻なのは雨季にともなうマラリアやコレラ感染で、8月に入りマラディ、タウア、ザンデル州など6州で感染が拡大しているコレラは、既に感染者数4283人、死亡144人(9/14時点)とコロナ禍に迫る勢いを見せ、政府は強く予防を呼びかけています。

ところで、8月から9月にかけて開催された東京パラリンピック2020には、ニジェールから4人の陸上競技アスリートとパラリンピック・スポーツ連盟のハルナ・ウスマン会長らが参加しました。

ウスマン会長は、父親のように選手たちを支えている暖かい人物で、今年1月には、JICA札幌センターが開催したオンライン研修「地域に根ざしたインクルーシブアプローチによる障害者の社会参加」に参加したJICA研修員。

出発を前に選手団にニジェール・日本の国旗バッジとJICAが作成している簡単日仏会話集、ロゴ入りマスクを進呈し激励しました。残念ながらメダルには届きませんでした。パリ大会に向けて、ガンバレ、ニジェール!!



ウスマン会長(前列左から2人目)とアスリートたち



ご意見・お便りはこちら！ [ni\\_oso\\_rep@jica.go.jp](mailto:ni_oso_rep@jica.go.jp)  
過去の支所便りは[こちら](#)もしくは右の QR コードから  
編集長：小畑支所長 / 編集・デザイン：山本企画調査員





みんなの学校プロジェクトが帰ってきました！

支所便り2014年4月号よりお伝えしている同プロジェクトは、2004年の開始を皮切りに、これまでニジェールの教育に寄り添う形で歩んできました。その間、多くの専門家の方々に支えられ、今回第5フェーズの開始に至りました。今月号は、秋場専門家より今フェーズの取り組みについて寄稿いただきました。

## 第5フェーズ始動！

「みんなの学校」は、教育開発における課題に対して、普遍的な改善モデルの開発・普及を重ねてきました。そのニジェールでの歴史は、国内を比較的自由に移動できた2004年まで遡ります。それから17年間の全力疾走を経て、新たなプロジェクトメンバー2人が加わった第5フェーズ(!)。全団員遠隔でのスタートとなった7月から2か月が経ち、ようやく5人がニジェールに到着しました。今フェーズでは、初等と中等二つの教育分野で「読み・計算」の基礎学力向上を目指し、先行フェーズでも取り組んできた『質のミニマムパッケージ(PMAQ)』の普及と合わせ、さらなる算数力向上に取り組むとともに、国内でも大きな課題となっている女子の就学と継続の促進に取り組んでいます。今回は基礎学力改善モデルの普及に関する活動をご紹介します。

## もっと学んでほしい！ — 子どもたちに確かな基礎学力を —

教育省は基礎学力の強化を目的に、2018年から補修授業の実施に力を入れています。今回、新学期スタートの3か月間で実施される補修プログラムの全授業を、みんなの学校の学力改善モデル(PMAQ-TaRL-SRP)で実施したいと依頼がありました。協議の結果、2021学年度はマラディ州とザンデル州で本モデルを導入することが決まりました。これにより生徒の補修時間は、従来より1週間あたり10時間も増加することになり、対象2州の生徒約100万人が読み書き計算能力を獲得することが期待されます。西アフリカの教育課題として、80%の生徒は読み書き計算ができないという統計がしばしば引用されますが、本モデルの実施で、ニジェールではこの状況の逆転を狙います！

プロジェクトが8月中旬に事務次官はじめ教育省等関係者の出席のもと行ったアトリエでは、読みと算数それぞれで、生徒の習熟度をより詳細に把握できるようテスト項目の追加が決まりました(右表参照、写真①)。もっと学んでほしいという関係者の期待が強く表れた結果です。確実な成果を挙げる内容に昇華させられるよう、各州の実施状況を注視していきます。

読み	計算
<b>習熟度別学習カテゴリー</b>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・初歩的レベル</li> <li>・文字レベル</li> <li>・音節レベル</li> <li>・単語レベル</li> <li>・短文レベル</li> <li>・長文レベル</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・桁が認識できない</li> <li>+1桁のみ読める</li> <li>・2桁まで読める</li> <li>・3桁まで読める</li> </ul>
<b>テスト新規追加項目</b>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・音節</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・数の比較</li> <li>・数の並べ替え</li> </ul>



写真①

## もっと学びたい！ ー学び合う先生たちー

本モデルは、会合や研修をカスケード方式※で行い現場の教師まで技術を伝達します。このように「先生の先生」を育成することは、モデルへの理解を深めるとともに、関係者が現状の課題を理解することを狙いとしています。また、各種会合では各地で実施された優良事例を共有し、それぞれ実践してもらうことで状況の改善を図っています。8月中旬には、2州から指導主事や研修担当官をニアメに集め、「中央講師育成研修」を行いました。参加者によるシミュレーションでは活発な意見交換がありました(写真②)。下旬にはPMAQ-TaRL-SRPモデルの教員用指導マニュアルを対象2州に運搬するトラックがニアメを出発(写真③)。実はこのマニュアル作りの全体的なスケジュールは遅れに遅れ、もしもの対応を検討する事態も…。この瞬間を迎えるには関係者各位の努力と支所の皆さんの多大なお力添えを頂きました。まずは現地活動がこうして無事(?)スタートを切ることができて一同ホッとしています。さて、今回はここまで。女子就学にかかる活動は次回以降、追ってたっぷりご紹介いたします。

(みんなの学校プロジェクト 秋場 優歩 専門家)

※カスケード方式(研修)とは、対象を段階分けして次から次への情報を伝達する手法で、多人数を対象にする研修でよく使われます。その様子から徐々に広がる段々の滝がイメージされるので、カスケードと呼ばれます。今回のプロジェクトでは、中央から現場の教師まで4段階のカスケード方式で研修を実施します。



写真②



写真③



## 今月の支所活動：その頃支所では…（みんなの学校プロジェクト印刷物調達）



印刷所風景 手前は1ページずつ束ねる作業

みんなの学校プロジェクトの活動の一環として、10月の新学期に向けてザンデル州とマラディ州の小学校に教材と教師用ガイドを配るべく、100万冊の印刷が始まりました。この印刷業務を引き受けたA社は国際機関や政府から受注した印刷も行っていて、ニアメ市では大手の印刷会社です。同社との契約にあたり、細かく納期と冊数を区切り、梱包方法などを確認し、事前の打ち合わせは順調に進みました。

しかしながら何しろここはニジェール。何が起ころかはわかりません。大雨、停電、機械の故障、資材の不足などいくらでも原因となる要素はそこら中にあるのが現実です。支所の日本人もナショナルスタッフも本当にこの大量な調達作業が無事に進むのか、心配と不安は隠せません。印刷が開始した8月20日から、毎日スタッフが作業場に進捗を確認に行き、所内での情報共有を行っています。

印刷を開始してすぐ、私も印刷工場の視察に行きました。そこでは20名ほどが黙々とそれぞれの作業を行っています。印刷作業が終わった各ページを1冊分に束ねる人、真ん中でまっすぐ折る人、ホチキス前に紙を整える人。ホチキスを止める人、40冊ごとに束にする人など、日本であればすべて一連の作業は機械で瞬時にして終わると思いますが、ここでは印刷以外はすべて手作業です。

ここまでの納品は順調に進んでいます。しかしながらまだこれからが本番。さらに効率を上げるべく、印刷会社社長は機材を增強しスピードアップを図りました。最終納品は10月1日。さてこの調達業務の結果はいかに。次回に続きます。（企画調査員 大出 理恵）

半分に折る



ホチキス止め



40冊ずつ輪ゴムで閉じる



梱包の終了した印刷物の束



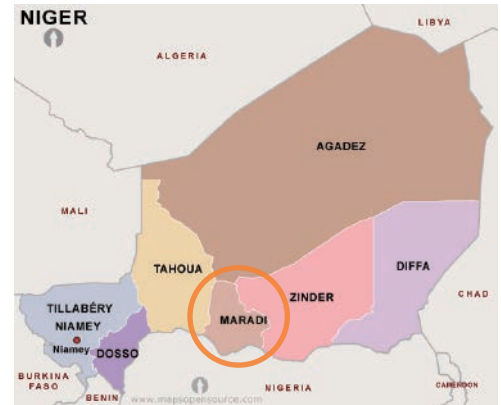
2州へと運搬するトラック





～マラディ州にてSHEP普及員研修を実施～

本プロジェクトは3年目を迎え、これまでにニアメ州、ドゥソ州、ティラベリ州にてパイロットサイトを実施してきましたが、今年6月から新対象州としてマラディ州を加えることになりました。マラディ州はニジェールの中央南に位置しており、南側はナイジェリアと国境を接しています。この地域に暮らす民族はナイジェリア北部の大都市カノと深いつながりがあり、古くからこの二つの都市間で貿易が活発に行われております。そのため、マラディ州はニジェールにおいて交易が盛んにおこなわれている都市のひとつであり、その市場規模は大きいです。2014年には7.5km<sup>2</sup>の敷地面積がある、ニジェールで一番の大規模な市場が新設されました。



マラディ州の位置  
(Map Open Source.comより作成)

また、マラディ州には小規模な貯水池が複数存在しており、トマト、ピーマン、モリンガ、レタス、トウガラシ等園芸作物の生産も盛んにおこなわれております。このマラディ州において本プロジェクトはSHEPを実施するため、州の普及員全員に対してSHEP手法の普及員研修を実施しました。SHEP手法において特に重要なのは市場調査ですが、これは受講者が市場を訪問して商人にインタビューをするもので、商人が求める作物、品種、作物の価格、買い取る量等を聞き取ってメモを取ります。また、ここにおいて大切なのは買取価格が高くなる時期をよく把握することです。ニジェールでは年末やラマダン(イスラームの犠牲祭)の間中は需要が高くなります。そのため、野菜の価格は高騰しやすくなり、作物によっては普段の値段に比べての2倍以上になります。そのため、この価格が高騰する時期に販売することを目指して、農作業の計画を立てて栽培を行います。

研修を受講した普及員は、今後パイロットサイトの農家に対して同様の研修を行います。上記に記したようにマラディ州では他の州よりもマーケットの規模が大きく、様々な産品を取り扱っております。このように市場の条件がいい地域において、今回のSHEPを実施することで、様々な成果が得られるのではないかと期待しております。(PASVA 町 慶彦 専門家)



研修に参加した普及員

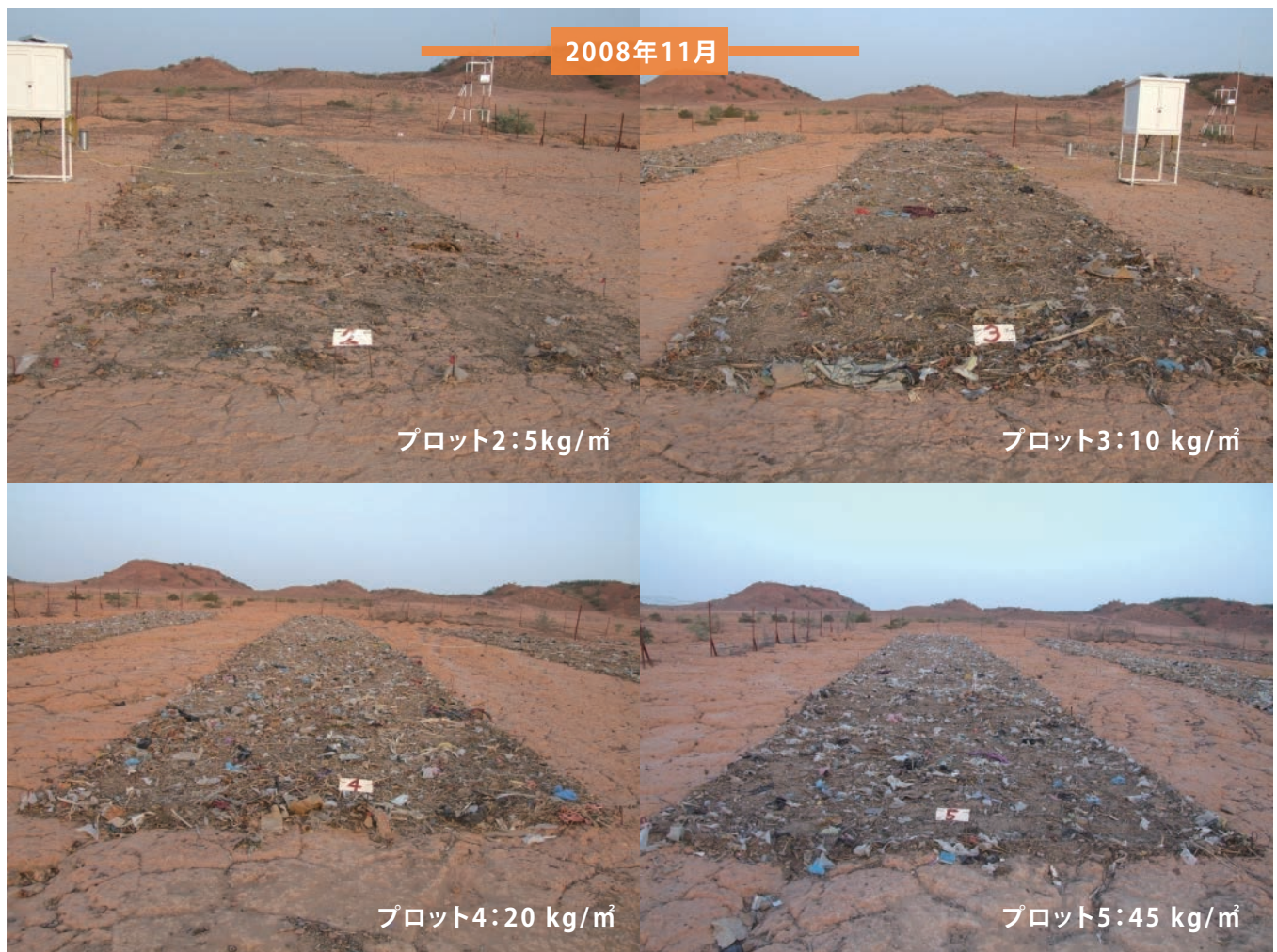


市場調査の様子

支所便り2016年7月号から不定期でお届けしている、京都大学アフリカ地域研究資料センター・大山修一教授の「ニジェールでゴミを集める日本人」シリーズ第32話。今回はゴミの量と植物の育成について、2年間のビフォーアフターについて寄稿いただきました。

先月号では、ニジェールでゴミを分解し、植物を生育しやすい土壌をつくるのはシロアリだという説明をしました。シロアリは団粒構造をつくり、雨季に植物が生育するよう促して、乾季に枯れる植物を餌にしているのです。ゴミを荒廃地に投入することによって、シロアリがゴミに集まり、植物の生育を促進し、その枯死植物を餌とし、ふたたび植物の生育を促すという自然のたくみなプロセスがあるのです。

今月号では、ごみによって荒廃地を緑化するのに、いったいどのくらいの量のゴミが必要なのかという話をしたいと思います。2008年のことになりますが、ニジェールの都市の住宅地にあるゴミ捨て場からゴミを集め、荒廃地に設置した実験圃場で緑化実験をおこないました。フェンスで区切られた50m四方の土地に、長さ4m×30mの短冊状の5プロット（プロット1～5）を作成しました。プロット2には5kg/m<sup>2</sup>、プロット3には10 kg/m<sup>2</sup>、プロット4には20kg/m<sup>2</sup>、プロット5には45kg/m<sup>2</sup>のゴミを投入しました。それぞれ合計のゴミ重量はプロット2が600kg、プロット3が1,200kg、プロット4が2,400kg、プロット5が5,400 kgとなりました。対照区のプロット1にはゴミを投入しませんでした。

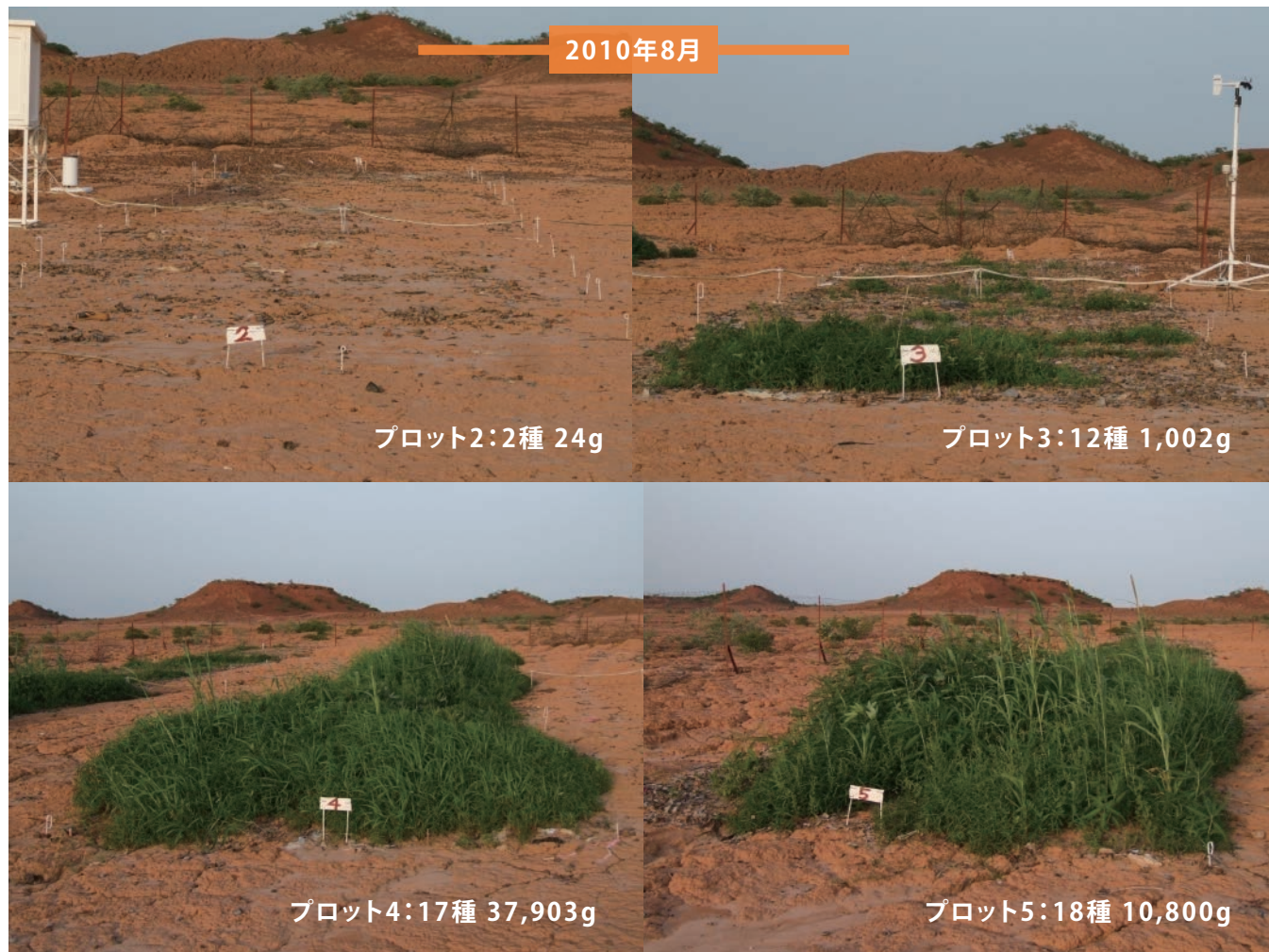


ゴミを投入しなかったプロット1では植物の生育は認められず、荒廃地のまま、固い岩盤がむきだしたままになっています。プロット2では1年目に16種の植物が生育し、その合計重量（風乾重量）は310gでした。



プロット3も16種の植物で、4,003gでした。プロット4に生育したのは35種の植物であり、その重量は59,547gでした。プロット5では17種の植物が生育し、その重量は43,847gでした。1年目に生育する植物の重量のうち多くを占めるのはトウジンビエであり、それは脱穀や製粉作業の途中に、穀粒である種子がゴミに混入することが関係しています。

フェンスの外と同じ状況を想定し、この圃場に生育してきた植物をすべて刈り取り、フェンスの外へ持ち出し、可食部は友人たちに提供し、飼料となる植物は家畜の餌としました。



2年目以降になると、トウジンビエは減り、*Borreria radiata*や*Hibiscus sobdariffa*、*Indigofera procureana*、*Gynandropsos gynandra*といった住民が食用に利用する有用植物や家畜に飼料として与える植物の生育が増えます。3年目になるとプロット2ではまったく植物は生育せず、ふたたび荒廃地に戻りました。プロット3でもゴミの投入量が十分ではなく、植物の生育は減少しました。プロット4とプロット5植物の生育は十分で、ハウサの農耕民も、フルベの牧畜民も放牧地としてゴミの投入量は十分だと判断されました。家畜の放牧地を造成するためには、都市から運搬するゴミの量はすくなくとも20kg/m<sup>2</sup>を目安にする必要が明らかとなりました。このゴミの重量は、厚さ2cmに相当します。

トウジンビエの穀粒は小さいので、ゴミに混ぜられて捨てられます。ゴミからその種子が発芽するのです。



農村におけるトウジンビエの脱穀作業



## ニジェール紹介：イスラム犠牲祭（タバスキ）の様子



### 前日から溢れる活気とヒツジの渋滞

7月20日。タバスキの前日。この日のニアメ市は、ややソワソワした人で溢れかえっている。街中を見渡すとヒツジ、ヒツジ、たまにヤギ。そして鶏。さらにそれを買求める人々。いつもの日常と異なる風景に、私も思わず息を飲み込み、既に始まった祭の活気に圧倒される。

人々は目ぼしいヒツジを見つけると、「あの角が大きいヒツジはいくらだ!」と車の中から交渉をはじめ、一頭当たり60,000F~200,000FCFA(12,000円~40,000円)で購入していく。目の前を走る車をよく見ると、ヒツジが後部席に2頭乗車しており、暴れてガラスが割れないか、事故なく家までたどり着けるのか見ているこちらもヒヤヒヤする。

ヒツジを焼くための道具も人気だ。ヒツジを捌くためのナイフ、木炭、フレーム、串刺し棒など街中のそこら中で見かける。これまで燃料は薪が主流であったが、現在は砂漠化の影響により木材価格が高くなり、よりエコで安価な木炭が主流になりつつあるようだ。また使い捨てにならない器具の普及も進み、特にアルミで作成されたフレームが一押しされていた。

### 消えたヒツジと家庭の味

7月21日。タバスキ本番。私は友人の家に招かれた。街中からヒツジは消え、歩いている人もほぼいない。雨季の嵐が去った後の静けさによく似ている。アザーンを遠くに聴きながら友人の家に到着すると、既に10頭のヒツジが捌かれていた。男性は手際よく内臓を取り出し、串に刺し、火に近づける。女性は内臓を洗い調理に励む。羊肉が並び、下味を付ける光景を眺めながら、この非日常が各地で行われているのかと想像を膨らませる(ややショッキングな光景のため、興味のある方は「niger tabaski」と画像検索を)。

翌日。私は尋ねた友人を含め、数家庭から羊肉のお裾分けを貰った。家ごとに肉の焼き加減や、香辛料の分量、和え物が異なりどれも美味しい。お裾分けはお世話になった人や、普段あまりお肉を食べる機会がない人に分けるという。友人曰く「タバスキは誰もが楽しむことができ、人と人の繋がりを大切にする」とその言葉が深く印象に残っている。来年のタバスキも楽しみにしたい。(企画調査員 山本 主税)